

出題のねらい

㊦は、地球物理学者である赤祖父俊一氏の『知的創造の技術』からの出題です。一般的に、「芸術」は「主観的」で、「科学」は「客観的」であると思われていますが、筆者は科学者の思考が必ずしも「客観的」でないと指摘し、科学における「創作」の重要性を説いています。問題文は、客観的に集められた「観測事実」を「統合」する作業が「極めて主観的」であることから、「科学創造」の根本は「主観的」であり、その点で「芸術」と「科学」は同じであることを説明している部分です。科学の発展に「論争」が不可欠である理由を、きちんと読み取ることができるかがポイントとなります。

㊧は、藤原道綱母の『蜻蛉日記』からの出題です。筆者のところから足が遠ざかっている夫ですが、筆者の隣家が火事という事態にあっても、なかなか姿を見せず、そのことを筆者は恨めしく思っているという場面です。夫が現れる前と後での筆者の心情の変化が読み取れているかを確認するため、時刻や方角を表す古典常識や、「ものす」のような古文重要単語、古文特有の主語の省略や変更に関する問題を出題しました。火事前後の状況を描写した箇所と、筆者の心情表現にあたる箇所をきちんと読み分けることができるかがポイントになります。



【解答】(50点)

問一	a 基礎	b 優越	c 報道	
	d 寒冷	e 隠		(各2点×5)
問二	当たり前			(3点)
問三	I イ	II ウ	III エ	IV ア (各3点×4)
問四	客観的			(3点)
問五	いかに対象を識別するかによって使う考察と数式が異なってくる(から。)			(4点)
問六	集められた実験や観測「事実」から犬か猫かを決める(ということ。)			(4点)
問七	地球の温暖化の原因が、人類活動により放出される炭酸ガスの温室効果とする説を支持する人と太陽の影響などの自然変動によるという説を支持する人の論争になる。			(6点)
問八	ア			(4点)
問九	エ			(4点)

【解説】

問一 漢字の知識を測る問題です。a「基礎」は、よく書いていましたが、bは「憂越」「憂悦」といった誤答が目立ちました。cは「道」が「同」「導」となっている間違いが多かったです。dの「寒」や

eの「隠」は、線が一本多かったり、少なかったり、偏が違っていたりと、ケアレスミスがありました。

問二 語彙力を測る問題です。「当然」とは「そうあるべきこと。当たり前」の意味なので、同じ意味の語句を探すと「当たり前」があることに気づきます。日ごろから論理的文章によく見られる語彙を中心として知識を蓄積しておくことをこころがけるようにしてください。

問三 語彙力(知識)、および文脈に合致する言葉を選び取る、思考力・判断力をみる問題です。空欄補充問題は、筆者の論旨の展開に関わる語を出題部分としました。この問題での設問選択肢は、いずれも副詞です。IIは、「組み立てた科学者の創造性を認め、記念」した例として、「メンデルの法則」「マクスウェルの方程式」「シュレーディンガーの方程式」が挙げられているので、ウ「例えば」を選びます。IIIは、「科学は正確な実験や観測を基礎とする」といったん認めた後に、「しかし、そのようにして集められた実験や観測『事実』から……統合の作業は、極めて主観的な作業」と述べられていることから、エ「もちろん」を選びます。

問四 文脈に合致する言葉を選び取る、思考力・判断力をみる問題です。科学は、「正確な実験や観測」によって集められた「事実」を基礎とするが、そうした「客観的」な事実から判断する「統合」の作業は、極めて「主観的」な作業であると述べられています。科学の基礎は「客観的」であるけれども、科学創造は「主観的」であるという対比に気がつくかがポイントでした。

問五 理由説明問題。末尾の「から」に合うように記述をまとめます。「画家」と「先端科学」が対比され、「画家」が動物を描く場合、「少なくとも対象が犬であるか猫であるかを十分知って」いるが、「先端科学」は「まず対象が犬であるか猫であるかもわかっていない」ため、「まず対象を判定しなくてはならない」とあります。その理由は、傍線部の前の部分で述べられています。この部分の論旨の読み取りから思考力・判断力をみる問題です。文脈の流れを的確につかんでいれば、解答となる一文に気づくことができます。正答率は6割程度でした。「いかに」を外してしまうと減点です。

問六 内容説明問題。傍線部を含む段落に「観測事実」は多くあるが、その中からどれを選ぶかは科学者によるから」と説明されており、また、本文後半で「対象を犬とするか猫にするかということに相当する」とあり

一般入試／国語(前期)

ます。この二箇所を解答の根拠とし、犬・猫を使って説明をします。単純な抜き書きなのですが、こちらは正解の場所が見つからなかったようで、正答率は低かったです。

問七 地球温暖化問題について説明する記述問題。字数制限を設けなくて、二点に関して問題文に書かれていることを理解し、自分の言葉でまとめてもらう問題でした。その二点は、地球の温暖化の原因を、「炭酸ガスの温室効果とする説」と「自然変動によるという説」の二つの説を指示する人たちがいるという点です。この二点を解答欄に合うようまとめることが重要です。解答欄に心折れず、しっかりまとめた人は、きちんと点数をとっていました。

問八 内容説明問題。文脈構成の把握と本文終結部の論旨が読み取れているかどうかを選択肢形式で測り、思考力・判断力をみる問題です。傍線部の後では、「一方が優越してくると」起きる問題の例が述べられており、傍線部の具体的内容は本文終結部で説明されています。そこに気がつくと、「科学の本質はこの論争であり、論争によって研究が磨かれていく」という一文を見つけることができます。「この論争」を「仮説を立てて論じ合う」と言い換えていることに気づけば、アを選ぶことができます。イやエを選んだ人も多く、3割程度の正答率でした。

問九 同じく、内容説明問題。筆者は、地球温暖化の「原因として挙げられる『事実』も数多く、全部を説明することは不可能」であり、客観的に集められた観測を基にして、それぞれの立場の科学者が、自らの説を支持するように事実を統合していると述べています。この部分の読解が的確になされているかを選択肢形式で測り、思考力・判断力をみる問題です。文脈の流れを的確につかんでいれば、「炭酸ガス論」もこうした説の一つであり、地球温暖化の原因のすべてを説明することはできないはずであるのに、そう決めつけてしまうことで、科学の本質である「論争」がなくなり、さらに研究が磨かれる可能性がなくなるというエの選択につながります。



【解答】(50点)

問一	a 築地(築土も可)	b 朝寝	(各2点×2)		
問二	① イ	② ア	③ ウ		
	④ ア	⑤ イ	(各2点×5)		
問三	唐土ぞ		(3点)		
問四	(1) ① イ	② オ	③ ア	④ カ	(各2点×4)
	(2) きっと戸惑わせているのではないだろうか。				(4点)
問五	イ		(3点)		
問六	隣家の火事とそれに伴う様々な出来事。		(4点)		
問七	ウ		(4点)		
問八	隣家の火事という大事が起こっても、夫は様子を見にさえ来ないと不満を募らせていたところへ、心配してやって来てくれたから。		(6点)		
問九	① 土佐日記	② 紫式部	(各2点×2)		

【現代語訳】

十八日に、清水寺へお参りする人に、またこっそりと同行した。初夜の勤行が終って寺を退出すると、時刻は真夜中の子の時(午前0時)ごろであった。いっしょに行った人の家に帰って、食事などしている時に、従者たちが、「この西北の方角に火事が見えるから、外へ出て見よ」など言うと、「遠いよ、唐土だよ」などと答えている声が聞える。心の中では、遠いとはいってもやはり気になるあたりだと思っているうちに、人々が「火事は(お隣の)長官殿のお宅でした」と言うので、ほんとに肝がつぶれるほど驚いてしまった。

わたしの家も、そのお邸とは土塀を隔てているだけだから、大騒ぎをして、若い人をとまどわせているのではなからうか、なんとか早く帰りたいたと、あわてふためいて、それこそ車の簾を掛けるひまさえなかった。やっと車に乗って帰って来た時には、すっかりおさまっていた。わたしの家は焼け残り、長官殿の人もちらに集まっている。この家には大夫がいたおかげで、どうかしら、裸足で逃げまどわせているのではないかしらと案じていた娘も車に乗せ、門をしっかり閉じたりなどしていたので、不審者や盗賊による狼藉沙汰などもなかったのだった。ああ、この子も男として、よく取りしきってくれたことよと、様子を見聞きするにつけても、胸が熱くなる。逃げて来た人々は、ただ、「命からがらでした」と嘆いていたが、そのうちに火事もすっかり鎮まって、しばらくたつたけれども、来なくてはならないはずのあの人はやってこず、「これこれです」と火事の報告をすべき人は、あちらの雑色とか侍とか、かねがね聞き及んでいた人の誰に聞き合せてみても、やはり報告はしたと言うのに、あんまりだ、あきれたことだと思っている時に、門をたたく音がする。召使が見に行つて、「殿がおいでです」と言うので、すこ

し心が落ち着いたような気がする。さて、「こちらに来ていた男たちが知らせに来たので、驚いてしまった。思いのほか遅くなったのが、申し訳ない」などと話しているうちに、時がたってしまって、もう鶏が鳴いたと聞き聞き床についたので、まるで何事もなかったかのように朝寝をしてしまったのだ。朝になっても、見舞客が多くごたごたしているというので、ゆっくり寝てもいられず、起きて対応する。「ますます騒がしくなることだろう」ということで、慌ただしく帰って行かれてしまった。

しばらくして、あの人から、男の着物などを、たくさん届けてくる。「ありあわせの物ばかりで。長官にまず」と添え書きがしてあった。「そちらに避難して来た人たちに配るがよい」ということで用意した物は、まことに急ごしらえで、濃い檜皮色で仕上げている。あまりに粗末なので、見る気もしなかった。

【解 説】

問一 漢字に直す問題。「築地(土)」は、土をつき固めた土塀。築地塀で、貴族の邸宅を囲うものです。古文では都の風景描写として頻出する語であり、都を中心とした描写の多い古典文学作品を理解するためには知っておいて欲しい語です。「朝寝」は、「い」が睡眠を意味する名詞です。「朝寝(あさい)」「熟寝(うまい)」「安寝(やすい)」などの複合語として用いられるのが普通で、助詞「を」「も」などを下接して動詞「寝(ぬ)」と共に「いを寝(ぬ)」「いも寝(ぬ)」などの言い回しで用いられます。単に知識を問うだけではなく、作者の安心感を表現した語として理解できているかどうかを問いました。

問二 事実の推移と展開を追う力を理解するための語句を古語知識も含めて問いました。①「子」は、十二支を時間区分に配当し時刻を表すためのもので、現在で言う深夜0時頃の名称です。現在でも生まれ年を言うために使われる干支の順番を覚えていれば理解できます。②は平安時代語特有の一般的な動作を具体的には言わず婉曲に表現する語句です。③「乾」も①同様に十二支を方角の名称に配当した名称に基づく文字で、同じく干支の順番から答えが導かれます。④「らうがはしき」は形容詞シク活用「らうがはし」の連体形です。「騒がしい」の他にも「乱雑である」などの秩序の乱れを表現する際に使用されます。⑤「あやし」は、様々な局面に用いられるため文脈からの読み解きも必要な重要古語です。基本的に「一般的でない、普通ではない」判断をする場面で用いられ、それを文脈合わせて理解していくことになります。ここは、「いとはかに、檜皮の濃き色にてしたり」からどう考

えるか、でした。古文を読むための形容詞の学習は、その語が持っている基本的な意味を理解し、そこから文脈に即してどう解釈すればよいのかをポイントにして進めておくといでしょう。

問三 表現の手法を理解できているかどうかを問う問題です。「唐土」は、本来は中国大陸を指す語です。そこから、距離を隔てた遠い地を比喩的に言い表す表現が生まれていきました。ここでは、それを誇張気味に応用して「今居る場所からは、かなり距離がある」という意味で用いています。

問四 古典文法に関する問題です。助動詞が接続して使用されることで、個々の意味以外に特別な意味合いを含むようになる現象があります。とりわけ「完了の助動詞+推量の助動詞」が強意を含む用法は、この組み合わせ以外にも良く見受けられるものです。また、係り結びの法則は、古文を読み解くための重要な基礎事項です。しっかりと押さえておきたいところです。口語訳する際には、「きっと」等の語を補い、この強意用法を織り込むことが肝要です。また係助詞「や」が疑問の意を表すことを訳出することも重要ポイントになります。

問五 多義語である「かなし」の語義及び文脈と関連した読み取りが出来るかどうかを問う問題です。形容詞「かなし」は、対象が人間である場合には、その相手に対して強く心惹かれる様子を表すところに基本の意味があります。男女や肉親に対する強い愛情を表す場合と、離別に伴う強い哀惜の情を表す場合がありますが、ここでは離別の場面は描かれてはいません。「見聞く」内容は、直前の文にある「をのこ」の行動であって、自宅に残してきた若者の対処ぶりを評価しているわけです。

問六 「語りつ」の内容を読み取るには、誰が語ったのかを知ることが重要です。この文脈では「雑色や侍やと聞きおよびけるかぎり」とあり、さらにその直前でこれらの人々をひとまとめにして「『さなむ』と語るべき人」と表現している点に着目してください。「こんな事態を報告するべき人」が、「もう報告しました」と言っているのですから、その報告内容が解答となります。

問七 この設問でも、この状況の中で訪問によって作者の心情に大きな変化をもたらすのにふさわしい人物と言えば誰なのかを前後の文脈から探します。設問の状況説明に「訪れの遠のく夫を待ち続ける日々」とあるのも大きなヒントとなるでしょう。古典文

一般入試／国語(前期)

学作品の中でも、とりわけ平安文学作品は人物関係の描写が婉曲的になりますが、登場人物に関する言及は必ず文中に存在します。人間関係を注意深く読み取る練習をしてください。

問八 表前問と連動して、作者の心情変化の様子とその原因となる出来事が文章の展開から読み取れているかを問うています。単なる抜き取り口語訳ではなく、文脈理解を自分の言葉で表現する練習をしてください。

問九 文学史の問題です。平安時代の文学史は、『源氏物語』以前と以降で大きく流れが変わっていきます。これに、当時の文学の主流であった和歌の流れ、特に『古今和歌集』以降、約半世紀毎に編纂された勅撰八代集の歴史を重ね合わせて学習しておくといよいでしょう。紀貫之は、『古今和歌集』編纂の中心的人物であった一方で、『土佐日記』という日記文学の先駆けとなる作品を残しています。紫式部も歌人としての活躍に並行して『源氏物語』を世に出し、『紫式部日記』も書き残しています。